

阿Qの精神構造

——「賢人、馬鹿、奴隸」との関連において——

A study of AhQ's Mental Structure

—— in the relation of The wise man, The fool and The slave ——

冉 秀*

RAN Xiu

(要旨)

本論文は、「阿Q正伝」の登場人物の思想について、魯迅の寓話「賢人、馬鹿、奴隸」(1925・12、『野草』)の登場人物の思想との関連の下に考察するものである。

「賢人、馬鹿、奴隸」の「奴隸」は、生活に不満があっても「賢人」の言葉によって慰められ、それによって「主人」への不満が解消される。「賢人」の行動は、主人に対する「奴隸」の従属と忠誠を補強する。そのような行動によって彼は「賢人」と呼ばれる。それに対し、「馬鹿」は実際に「奴隸」を助ける行動に出るのだが、そのことによって彼は民衆（「奴隸」たち）から支持されるどころか、逆に「馬鹿」と呼ばれ、迫害される。「賢人、馬鹿、奴隸」は、「主人」による民衆支配を実質的に補強して、「奴隸」を「奴隸」たらしめる「賢人」が尊敬され、逆に「奴隸」を実際に助けようとする人間（「馬鹿」）が迫害されることを描いて、当時の中国の現実を戯画化している。

「阿Q正伝」の舞台である未荘では、村人は趙旦那を頂点とする封建的支配体制（「主人」）のもとにあり、その身分に従うことが阿Q（「奴隸」）の行動規範となっている。阿Qはこの規範の中で打撃を受けたときには、精神勝利法（「賢人」的行動）によって自己欺瞞をする。しかしまた、時には、阿Qの言動はそのような規範に抵触し、それを逸脱する傾向（「馬鹿」的行動）を含んでいる。例えば、それは最期の時、阿Qの抵抗から出た言動があり、彼自身が封建的身分制度への批判や反抗を明確に自覚しているわけではないが、しかし客観的にみれば彼の振舞いは封建的支配体制への批判の萌芽を含む。そのような意味で、彼の言動には歴史的社会的な意味が認められる。そうした「馬鹿」的行動は村人（「奴隸」）から非常識として批判され、排斥され、遂に阿Qが処刑されて当然とされる。阿Qの人物像とその運命には、明らかに「賢人、馬鹿、奴隸」に通じるものを見取することができる。「阿Q正伝」は、阿Qの悲劇的運命を通して、当時の中国の封建的体制の変革が困難であること、国民性の改革が困難である現実を、痛烈な皮肉の下に描き出していると言える。

1 はじめに

「阿Q正伝」は、1921年12月4日から1922年2月12日まで、『晨报副刊』¹に連載された魯迅の代表作の一つである。この作品が掲載されて以来、国内外で多くの注目を集めた。これ

までの研究者たちは主に、阿Qの性格特徴、阿Qの中に含まれる国民性の悪の内容を分析して、「国民性の悪い品性を一身に」集めた阿Qを批判する論が多かった。その中で林興宅の論文²と汪衛東の論文³は一致して、阿Qの性格をお互いに矛盾し、対立しあう因子と

* 山口大学東アジア研究科 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

とらえる。

林興宅は「阿Qの性格システムを論じる」⁴（〈論阿Q的性格系統〉）で、初めて阿Qの性格をシステム方法論⁵の中で考察するようになった。林論文はまず、阿Qの性格を十組の対立的な要素⁶と分類し分析した。そして、阿Qの心理的要素を全体的に言えば、三つの特徴の中におさめられるとする。それは、「二重人格」、「内心に退縮する」、「自由な意志を失う」⁷である。林論文によれば、阿Qの性格を「奴隷的」性格の典型と述べ、それは阿Q性格の「自然質」であり、阿Qの他の性格要素がみんなこの「自然質」に制御されるという有機的全体であると位置付けた。

それに対して、汪衛東⁷は、阿Qの性格を「自己欺瞞」、「健忘」と「私欲中心」とまとめた。汪衛東はまず、阿Qを「国民の悪い品性の典型」とし、阿Qに表現された国民性の悪い品性を十種類に分けた。そして、阿Qの精神勝利法を「阿Qの弱勢生存策略」として分析した。その生存策略は「自己軽蔑」、「自己慰安及び自己をごまかし」、「強者には屈服、弱者には横暴」などである。具体的に言えば、「阿Q正伝」の前の三章は阿Qが「その場しのぎで生きる」環境を展示している。後の六章はさらに進んで阿Qの「その場しのぎで生きる」環境を展示しているが、最も重要なのは、「私欲中心」⁸という性格システムの原点、或いは国民性の悪い品性の本質を示したとする。「その場しのぎで生きる」について汪衛東は次のように説明した。阿Qが未荘の最低層に位置し、自尊心を維持したいができないという状態が、「阿Q正伝」で阿Qに提供された「その場しのぎで生きる」社会環境であると。

汪衛東論文が前述の先人の諸論文と一致するところは、「阿Q正伝」が国民性の悪い品性に対する暴露を宗旨とするという立場に

立っているところであり、その特徴は、「魯迅の批判の最終的目的地が『私欲中心』という性格原点である」とする点にあると思われる。汪衛東論文は魯迅研究界で大きな論争を引き起こした。汪衛東論文の啓発的な意義は、阿Qの性格を「国民性の悪い品性の典型」とし、さらに「阿Q正伝」を全体から重視し、そのテキストの整合性と統一性を分析したところである。論者はその研究方法に賛成であり、論者の論考の参考にすることができる。

以上のように、矛盾しあう性格を持つ阿Qは、作品全体から見れば、どのような意義と役割をもって登場しているのだろうか。この点について、両氏の論文は触れていない。

阿Qについてまず感じられるのは、自分のものの見方（価値基準と生き方）を持たないということである。具体的に説明すれば、次の4点を挙げることができる。1) 常に人目を気にして、人に対する評価や判断を社会的位置の上下に基づいてしか考えられないことである。上の者に対しては卑屈になる代わりに、下の者に対しては尊大、傲慢になる。2) プライドが非常に高く、自分が人の眼からどう見られるのか、偉いと見られるかどうかを常に気にし、それが自分の行動を強く規定していること。3) そこでの「人の眼」とは実は彼の内部における「人の眼」であり、それに対して如何に自分のプライドを保持するかに執着、執心すること。4) 彼の内にも生理的、本能的要求が抜きがたく存在し、時にはそれを外に対して行動して表出すること。阿Qの人物像については、ほぼ以上のような特徴を指摘できるが、しかし彼の人物の意義を明らかにするにはそれらを箇条書きしただけでは不十分であり、重要なのはそれらが相互にどう関係しあい、どのように彼の全体的人物像を形作っているかということである。この点

を考える上で、大きな示唆を与えてくれるのが、魯迅の寓話「賢人、馬鹿、奴隸」(1925・12、『野草』)である。本稿においては「賢人、馬鹿、奴隸」に描かれた三者の相互関係を踏まえることで、「阿Q正伝」における阿Qの人物像をその構造的に分析し、その意義を明らかにしたいと考える。

2 「賢人、馬鹿、奴隸」の人物像

この節では、まず魯迅の描いた「賢人、馬鹿、奴隸」⁹の中での「賢人」、「馬鹿」、「奴隸」のそれぞれの概念と人物像の説明から始める。

2.1 「賢人」の人物像

「賢人」は、「奴隸」が悲しそうに自分の属する「主人」に対して愚痴をこぼすのを聞いてから、すぐに「まったくお気の毒だね」¹⁰という慰めの言葉を言い、「奴隸」の不満を収める。「奴隸」がさらに「主人」に対する不満をこぼし続けると、「賢人」はまた彼に寄り添う言葉を発しながら、「奴隸」に同情する気持ちを見せる。こうして結局、「奴隸」を今までの生活に安心安住させる。「賢人」が「奴隸」にあたえる精神上での慰めは、「奴隸」の今までの生活に何も実質的な改善がないままで、「奴隸」を安心させて「奴隸」としてあり続けさせ、さらに「主人」に忠実であるようにさせる。「賢人」は、「奴隸」がただ愚痴をこぼすだけで、他人に慰めてもらうことで満足すること、そして「賢人」から慰められる「奴隸」が絶対に「主人」に反抗しないことなどをよく知っている。それゆえ「賢人」の思想と行動は「主人」には何の脅威にもならないし、その「奴隸」への慰めが「主人」に利益をもたらすことから、「賢人」は、「主人」の実質上の支持者、擁護者、補

強者であると言える。

2.2 「馬鹿」の人物像

「馬鹿」は、その考えが非常に単純で、何かを考え付くと、すぐに行動に移す人間である。何か問題があれば、すぐに行動に出る人である。彼は、「奴隸」のこぼす愚痴を聴くと、いきなり「主人」のことを「ばかめ」と怒鳴った。また、自分の部屋に「四方とも窓がありませんし…」という「奴隸」の愚痴を聞くと、すぐ自分の不満を現して、「窓を開けてくれと主人に言えんのか」¹¹という。「奴隸」の「めっそうもない…」¹²ということを聞くと、すぐに「奴隸」のために、「奴隸」の部屋の「泥の壁を外から壊しにかか」る行動に出た。そして、「馬鹿」はその壊す行動が「主人」に「叱られる」と「奴隸」に言われても、「かまわん」と答える。つまり、「馬鹿」は「主人」に処罰を受けても、「奴隸」を助けたいという気持ちを持っている。「馬鹿」のこれらの行動様式は、「賢人」の行動様式とは違うというより、むしろ正反対と言ってもよいかもしれない。というのは、「馬鹿」は「奴隸」のこぼす愚痴に対して、精神上からでなく、「奴隸」を圧迫した「主人」に抵抗する行動に出て、行動上で「奴隸」を助けようとする。「馬鹿」は、実質上で「奴隸」を助けられる、そして実質上で「奴隸」の生活を改善できる行動をした。しかし皮肉なことに、「奴隸」を本当に苦境から解放しようとする「馬鹿」の行為は、先ず「奴隸」自身に反対されてしまい、「奴隸」に追い払われてしまった。そればかりでなく、「奴隸」は自分を解放しようとする「馬鹿」を悪人とし追い払う。「賢人」の精神上での慰めは、実質的には何もないのに、「奴隸」に「救助の手」とされ、「奴隸」に支持され擁護されている。さらには「奴隸」に自分の恩人として尊敬されてい

る。つまり「馬鹿」の考えも、行動も、「奴隸」が忠実である「主人」の意向に反するので、いずれも非「常識」な行動とされた。「馬鹿」のこの非常識な行動は、実際に「奴隸」を救助できるが、しかし「賢人」にも「主人」にも非常に脅威をもたらす行動である。しかし「奴隸」は、「主人」と「賢人」と同様の、当時の社会秩序に従順な常識に支配されている。したがって「馬鹿」の非常識な行動は、「主人」が登場して阻止するまでもなく、「奴隸」たちに真っ先に阻止された。ゆえに「馬鹿」は、「賢人」や「主人」は言うまでもなく、「奴隸」からひどい仕打ちを受けた。

つまり「奴隸」はもともと「主人」への愚痴をこぼし、不満と抵抗の気持ちをもっていたのに、「賢人」の慰めによって全面的に「主人」に従う気持ちになる。「奴隸」が愚痴をこぼしながら、結局「主人」に全面的に従う推力に、「賢人」の慰めがある。「賢人」の慰めと見舞いのおかげで、「奴隸」は「奴隸」として縛られ、「奴隸」であり続ける。すなわち「賢人」の慰めは、「奴隸」の無意識のうちに、しっかりと「奴隸」の精神上の欲求を抑え、そしてすっかり「奴隸」の抵抗思想を奪った。したがって「奴隸」は本当に助けてくれる「馬鹿」の行動に反対し、本当に「奴隸」を救助する「馬鹿」を追い払ってしまった。「奴隸」は、以上に述べた「奴隸」的な思想にとらわれてので、「主人」に反抗する「馬鹿」の行動に反対したのである。

2.3 「奴隸」的性格の特徴

「奴隸」とは、一般的に言えば、一身が売買の対象となる商品的存在であり、決して人間的な存在とは見なされない。けれども魯迅の描いたこの「賢人、馬鹿、奴隸」の作品では、「奴隸」は、金で売買される存在として登場するわけではない。にもかかわらず、こ

の寓話で「奴隸」という用語がなぜ使われているのだろうか。それは、この「奴隸」が肉体的よりはむしろ精神的な本質において、「奴隸」的性格を持っているということに基づくものだと考える。

「奴隸」は、「人間並みではない」苦しい生活を送っている。絶望的な境遇に陥っている。「奴隸」は初めに自分の「主人」に不満を持ち、自分の絶望的窮地に愚痴をこぼす人間である。本来なら「奴隸」のこの窮地こそが、「主人」に抵抗する原動力となるはずである。しかし、「賢人」の慰めの言葉は「奴隸」の抵抗精神を麻痺させる麻酔剤となって、「奴隸」に自分の苦しい生活の不満を一時忘れさせ、「主人」に自ら抵抗し生活を改善する気をなくさせる。「賢人」の精神上での慰めのおかげで、「奴隸」は「主人」への愚痴をこぼしても、いっさい「主人」に抵抗しないばかりか、「賢人」の言葉だけの慰めによって、「主人」に対する忠実な支持者、擁護者でありつづける。

魯迅は、「奴隸」的性格が如何に形成されたかをうまく説明する。「奴隸」は生まれながら「奴隸」ではなく、彼はもともと愚痴を持ち、「主人」にも不満の気持ちを持っている。しかし、支配者層からその精神的な麻酔剤を吹き込まれることによって、「奴隸」は自らその反抗を放棄し、自ら望んで「主人」に対する擁護者になる。封建的社会では、その擁護者たち、「奴隸」たちがいることによって、封建的社会の様々な制度がその国民の中に貫徹する。それは確かに「我々はきわめて奴隸に変わりやすい、しかも奴隸になったあと、なお非常に喜ぶ」¹²という通りである。だからこそ、封建制度も数千年にわたって安泰に継続してきたのであろう。

以上のように、「奴隸」的性格が形成されたのは支配階級が行う、愚民政策が実施され

た結果である。¹³「奴隸」の「奴隸」的な性格は一旦形成されたら、改変することが非常に難しい。¹⁴「奴隸」たちは「主人」に盲従するという愚民政策に慣れ、そしてそれを一つの良し悪しを計る基準とする。「奴隸」たちは他人の行為をただ「主人」に従うか従わないかという基準を用いて、その行為を判断することしか知らなかった。奴隸たちは「己を以て人に考えを及ぼす」ことができない。さらに「推察によって同じように体感」できない。¹⁵だから奴隸たちは「イヌ豚のように扱われて来たのに慣れ、人間もイヌ豚と大差ないということを知るのみだ。(中略)人民は本当に感覚の無い皮厚の癩癩かきの象になって」¹⁶しまったのである。

「賢人、馬鹿、奴隸」の三者は、「主人」を中心とするワンセットになっている。「賢人」はその中で自己保身の考えを持つ人間であると言える。彼はだれとも摩擦を起こさず、だれにも嫌われず、安楽な生活をする人間で、みんなに尊敬されている。けれども、「賢人」がみんなに尊敬されるのは、彼が「主人」を中心とする封建的イデオロギーを安泰に維持する側の人間だからである。つまり「主人」に対して誰よりも実質的に奉仕する人間が「賢人」その人である。「奴隸」は「賢人」の慰めによって、「奴隸」の身分に縛られ、自分の「奴隸」的境遇に不満をもっても、「主人」に抵抗せずに自分の絶望的な身分に安住する。「主人」も「賢人」のおかげで安泰に存在する。「馬鹿」は、その思想上で「奴隸」の絶望的な境遇を認識したわけではないが、しかし彼は「賢人」に否定されても、身体上での行動で「奴隸」の絶望的な窮地を実際に助けようとする。それゆえ、「馬鹿」こそが、当時の社会において本当に価値がある人間であると言える。

しかし、社会に対して批判的な態度を含む

行動をする人間が、「馬鹿」とよばれ、自分のことしか考えず、自己中心的なエゴイズムのかたまりの寄生虫の人間が、「賢人」と呼ばれる。もっとも自分の「奴隸」的境遇に不満を持ち、「主人」に一番反抗力があるはずの「奴隸」が、「賢人」のために自分の「奴隸」的身分を忠実に守る。以上の、当時の社会に対する痛烈な皮肉をはらんでいる三者関係は、一つの統一的な構造をなし、揺るぎなく社会全体の体制の中に蟠踞し、当時の現実の内実であったと思われる。この三者の関係の有機的な相互関連は、破綻がなく、揺るぎなく、崩れる可能も見えない旧社会の絶望的现实をそのまま反映していると思われる。この絶望的三者関係を崩す唯一の希望は、「馬鹿」による、「主人に窓をひとつ開けてくれとはいわんのか、おまえに窓をひとつつけてやるのさ」という、実際上の行為にあると思われる。

以上、「賢人、馬鹿、奴隸」のそれぞれの登場人物の概念と相互関係の説明をした。

それぞれの概念とそれぞれの思想が、「阿Q正伝」のそれぞれの人物の思想と言動と重なっていると考えられる。以上の問題提起と「賢人、馬鹿、奴隸」の登場人物の思想構造との重なるの発見に基づき、次の節より「阿Q正伝」の登場人物の思想構造と行動様式がどのように関連するのかを考察する。

3 阿Qの生活する歴史的状況

阿Qの生活する当時の中国は、国外から、近代化を達成した西洋諸国の侵略に遭遇し、国内で、腐敗した封建的清朝政府に支配されている。そのため経済面において、当時の中国は非常に困窮した状態に陥っていた。多くの国民は長い間支配階級の封建的支配の下で愚昧で麻痺した精神状態に陥っていた。彼ら

は封建的支配の生活に慣れて、自らの精神状況に目覚めることがなかった。したがって、外国に侵略されても、封建的支配階級に搾取されていても、一向に自分の苦境を変える意志を持たなかった。当時の中国は厳しい内憂外患の状態にあり、亡国の危機に陥っていた。

このような厳しい社会現状の中で、一部の志士は当時の中国を救うために、西洋近代化を学び中国の強大化を図ろうとした。「外国の優れているところを学び、それによって外国を制御する」¹⁷として、日本や西洋諸国の近代化の技術、思想を導入しようとした。辛亥革命はそうした社会状況下で行われた画期的な歴史事件、革命であった。革命の主旨は当時の腐敗した封建的清朝政府を覆し、中国を西洋諸国のように近代化させることである。1911年10月10日、武昌で蜂起が勃発し、1912年1月1日、中華民国臨時政府が南京に成立した。

辛亥革命は、中国の数千年継続してきた封建的政権の形式上の終焉を宣告した。その過程で、一方では、阿Qのような農民が革命の主体となり得なかったことを示した。他方では、辛亥革命を指導する中国ブルジョア階級は、阿Qのような農民を動員し組織できなかったであろう。そして辛亥革命を指導する民主的なブルジョア階級は経済上軍事上で、やはり封建的勢力に依頼せずにはいられなかった。そして、その「民主共和」の西洋の近代化思想が全国民に貫徹しなかったこと、そしてブルジョア階級はその政治上軍事上での弱体、経済上での弱さで、当時の強大な封建勢力と封建軍閥勢力と徹底的に戦う力がなかった。さらに彼らは、封建的支配階級に圧迫された強烈な革命要求があるはずの農民に思想上から働きかけ、革命へ参加する力を発掘できなかった。

したがって革命後も、辛亥革命後の農村社会は、以前と変わらぬ貧困な状況に直面していた。支配者たちは強い者に出会えば、反抗しかねて、「中庸」の言葉によって粉飾し、自らを慰める。支配者層は外国に侵略された時、領土を割譲し、賠償に至るまでひたすら後退し、それでも恥辱と思わなかった。支配者層は精神上での勝利を追求した。支配者層は外国を野蛮国と称し、自らの腐朽した中国を「天朝」と自慢し、「中国は東方の精神文明の発祥地である」と自画自賛した。支配者層は中国の文明は匹敵する者がいないほど優れていると考え、全世界でも仰ぎ見られるべきであると考えた。したがって領土を割譲し、賠償するぐらいのことは取るに足りず、ただ精神上の勝利の幻想に浸かっていた。こうした状況は、先述のように、確かに魯迅が述べた通りである。「阿Q正伝」において、阿Qと趙旦那とは、その性質から見れば、実はまったく同じ種類の人間であろう。もし阿Qが勢力を得るとすれば、趙旦那になり、もし趙旦那が勢力を失えば、もう一人の阿Qになってしまうだろう。

すなわち阿Qの住む当時の社会において、農民は相変わらず支配階級に圧迫され、搾取されていた。そして、二千年にわたり継続してきた封建的イデオロギー、封建礼教などの封建的道徳が、被支配階級の下層民を精神上から麻痺させ害していた。封建的支配者の愚民政策は揺るぎもなく民衆の中に浸透した。これらの封建的愚民政策は、下層民を目覚めさせない麻醉剤になり、当時の阿Qのような民衆に自分の圧迫を受ける苦境や屈辱を忘却させた。そして彼らは無反抗、無闘志の状態に安住した。阿Qのような下層民は、すでにすっかり支配者の奴僕となっていた。そしてこの時期、民主的なブルジョア階級のエリートが提唱した西洋の近代化思想も、その

後の「新文化運動」等も、民衆の中に浸透しなかった。辛亥革命以降、もともと革命の原動力であるはずの阿Qのような下層民は、依然として支配階級の支配に反抗することが少なく、以前と同じように封建的制度に従順であった。こうしたことが、辛亥革命で提唱された近代化思想にその土壌、基礎を失わせる根本的な要因となったと思われる。

4 阿Qの「奴隸」的な性格の表現

まず阿Qの中の「奴隸」的性格を考察してみる。阿Qの「奴隸」的な性格を最初に指摘するのは、「阿Q正伝」の第九章「大団円」の中に出てくる阿Qを裁く人たちである。その人たちの中には、「老人と同じように頭をテカテカに剃ったのもいるし、一尺近くもある長い髪を肩へ垂らした、「にせ毛唐」そっくりのもいる。一様に横柄な顔つきで、おこっているようにじろっと彼の方を見た」。阿Qはその途端に、膝（ひざ）関節がひとりでに震えだして、思わず彼はひざまずいてしまった。

「立て。坐るんじゃない」長衣を着ている男たちがどなった。

阿Qは、その意味がわかるような気がしたが、どうにも立っていられなくて、からだが一りでにまがって、そのはずみで、ついにはいつくばってしまった。

「奴隸根性！……」また、長衣の男が、吐き出すようにそう言ったが、もう立てとは言わなかった。¹⁸

ここで長衣の男がいう「奴隸根性」は、すなわち阿Qが権力者に対するおびえる態度を指すのであろうか。あるいは阿Qが権威に対して条件なしに従う表示として自ら自然とひ

ざまづくことであろうか。あるいはまたは阿Qが抵抗せずに自分の犯行を認めることを指すのであろうか。これらの推測はしばらく置いて、先ず、阿Qはいったいどんな「奴隸」的性格を持っているのか。以下はそれについて分析しておこう。

まず、封建的身分制度に対する阿Qの「奴隸」的な性格を見てみよう。阿Qの住む未荘において、地主階級の趙旦那たちと被支配階級の村人と阿Qすべてが、封建的身分制度のもとで生活している。この身分制度によれば、趙旦那と阿Qとでは上下関係があり、趙旦那は身分の高い、上下関係の上層の人間である。阿Qは被支配階級で、身分が低い下層の人間である。この「上は上、下は下」というしきたりを阿Qも守っている。したがって阿Qは、趙旦那に怒鳴られたとき、「一言も自分が本当に趙姓であることを弁解しなかった」。そして、趙旦那に殴られるのを我慢し、「左頬をさすりながら」退出しただけであった。阿Qには趙旦那に従わなければならないという考えがある。それで、後に恋愛の悲劇のとき、趙旦那に罰金を科されても、阿Qは無論一言もなく、「全部承諾」した。こうしたことは、「奴隸」的性格からきたことであろう。また、「偽毛唐」に出会った時、阿Qの方がいつも打たれる目に遭った。阿Qは打たれるその瞬間、「打たれるものと覚悟」を決めて、「全身の筋肉をこわばらせて、肩ばかり突き出して」偽毛唐に殴られるのを待っている。阿Qのこの行動は、封建的身分制度と上下関係の行動規範の「奴隸」的な考えによるものであり、自分が被支配階級で下層民であるから、打たれるのが当たり前のことであるという考えがあると読み取れる。

つまり、阿Qは、当時の「男女に別あり」という道徳規範に対して、少しも抵抗せずに従順であった。そればかりでなく、無意識に

この男女道徳観の維持者になっていた。彼のこの主観上での考えも、「男女に別あり」の下での言動も、まさしく当時の封建社会の行動規範の範囲の中にあった。そしてそれらの封建的行動規範の下で、阿Qは自分がどのような不当な位置におかれても、思想上で抵抗する気持ちがないばかりでなく、言動上では当時の封建的行動規範の維持者としてあった。さらには、阿Qは、この「男女に別あり」という道徳規範との間に結んでいる「奴隷」と「主人」という強固な関係には無自覚であり、自らこの関係を維持してきたことも認識できずにいたと思われる。それゆえに、そのことが彼を男女恋愛関係からさらに離れさせ、彼を封建制度の被支配的地位（日雇いの貧しい農民）からも抜け出すことを困難にさせ、彼を永遠に女性と無縁にさせてしまったのであろう。

それから、封建制度を覆す目標を目指す辛亥革命に対する、阿Qの「奴隷」的な性格を見てみよう。家柄も家族も持っていなかった阿Qは、自分を圧迫する地主階級を革命する気持ちを誰よりも強く持つはずなのに、しかし阿Qはかえって革命に反対している。なぜかという、彼は封建的制度に対して、「革命することが謀反であり、この謀反が自分に具合の悪いものだ」という意見を抱いて、革命を「深刻に憎悪し」ていた。この点について、魯迅の論によれば、物質上と精神上で、「すべて硬直化した」民族は、「ほんの少しの改革でも妨害し」、それが自分に「不利をもたらすのを恐れ」ているので、いろいろな口実を借りてそれを拒むと言う。¹⁹ これは典型的な「奴隷」的な性格であろう。

以上のところから、阿Qは長い間、封建制度と封建思想の下で、自主独立を重んじる主体的態度を欠落させ、思想上から自分を束縛する封建的思想には少しも抵抗せず順重であ

る性格がうかがえると思われる。そこには阿Qの「奴隷」的な性格が示されていると思う。

つまり、当時の中国人の中に潜んでいる性格には、「自分が遭遇した苦境に麻痺すること、圧迫されても不抵抗、屈辱を忍んでどうにか生きること、お茶を濁すこと、媚を売ること、権力を振り回すこと、自己中心のこと」があり、さらに「健忘のこと」などがあった。こうした国民性は、ほとんど阿Qの中に表れている。確かに魯迅の言う、「老衰した国家は、たいていこのような現象を避けられない」。²⁰

阿Qの「奴隷」的な性格は、核心的についていえば、自分の不当な運命や、自分の低い身分を抵抗せずに受け入れたことだけでなく、ついにこれらの制度の維持者になってしまったことである。阿Qのこれらの性格は、一日二日の間に出来上がったのではなく、封建社会の支配者たちが長い間代々に愚民政策を継続し、阿Qのような下層民の中にも根付いたものであろう。封建的愚民政策と封建的イデオロギーが、代々にわたって民衆の骨の髄にまで浸み込んだ。阿Qに至っては、それがもう習わしや慣習となって、しっかりと服従するようになっていた。阿Qは、この封建的習わしに抵抗せず従順である性格を持っているからこそ、最後に殺されようとしても運命に従う気持ちを持っている。当時の社会で阿Qのような「奴隷」的な性格を持っている中国人は、当時の中国を西洋化させる途上の最大の妨害者になり、中国変革がなかなか前に進まない根本的な原因となったと思われる。

5 阿Qの中の「賢人」的なところ

それでは、阿Qの中の「賢人」的なところは一体何なのであろうか。阿Qは、もともと一人の日雇い農民として、家も家族

もない、地蔵廟に住んでいるルンペン農民である。一言で言えば、阿Qは当時の社会の最低層に属する人間である。阿Qは「その場しのぎで生きる」²⁾の社会環境の中で、その厳しい世間を生きるために、彼を支えてくれる、「賢人」のような効き目を持つものが二つある。一つが、阿Qの自尊心（プライド）で、もう一つが、彼の「精神的勝利法」であろうと思われる。次に阿Qの中の二方面の「賢人」のことを説明する。

5.1 自尊心（プライド）

それでは、阿Qはどのような生き方をし、当時の社会を生きていたのであろうか。このことを、以下で詳しく考察してみたい。

家も家族も持っていない阿Qは、固定的な職業も持っていない。他人の日雇い仕事によって自分の生計を維持する。そんな窮迫状態にいる阿Qは、いつも精神上での自尊心に依拠し、仮想の理想的世界に入った。阿Qの自尊心（プライド）が時折にわいてきて、劣勢状態にある彼を慰め、彼の「奴隸」としての不満を取められる。そのとき、彼の中の自尊心（プライド）がまるで一服の精神麻酔剤のように、彼の一切の不満を鎮める。そんな時の阿Qのプライドはあたかも「賢人」の慰めのような存在であると読み取れる。この「賢人」のような効き目がある自尊心は、いつも阿Qを仮想した優越世界に入らせ、精神上から彼を慰め、そして彼の中の不満を鎮める。阿Qにとって自尊心はまるで「賢人」的役割を果たす存在であると思われる。

次の文章を見よう。

阿Qはまた、自尊心が強かった。未荘の住民どもは、一人として彼の眼中になかった。はなはだしきは、二人の「文童」に対してさえ、彼は歯牙にかけぬ風のところが

あった。そもそも「文童」とは、将来おそらくは秀才に変わすべきものである。趙旦那と錢旦那が住民の深い尊敬を受けているのも、金持ちであること以外に、文童の父親であるのがその原因である。しかるに阿Qだけは、精神的にとくに尊敬を払う態度を示さなかった。おいらのせがれならもっと偉くなるさ、と彼は考えていたのである。

阿Qは、村民の深い尊敬を受けている趙旦那と錢旦那に対して精神的にとくに尊敬を払う態度を示さない。それは、彼が何もたない自分の劣勢状態に不満である表れであると同時に、彼の中の自尊心（プライド）が時折にわいてきて、すぐに「おいらのせがれならもっと偉くなるさ」という仮想する世界で自分を慰め、自分の中の不満を鎮めることができた。当時の社会の最下層に位置する阿Qは、一方では、当時の生存の難しい社会環境の中で、支配階級の圧迫、有力者の横暴に無抵抗である態度、すなわち自分の圧迫される地位に順応する「奴隸」的な面を示す。他方では、阿Qは他人を超える優越感を得るために、しばしばプライドで自ら作りだす仮想の優越の世界に沈んで、自分の「奴隸」的性格を守り続ける。阿Qの自尊心（プライド）は、このようにいつも劣勢状態に位置する阿Qに精神上での慰安、ただし「それしかない」精神上での慰めを与えた。それは実際の自分の劣勢の状態や、自分の厳しい苦境を変えるのに何の役にも立たないだろう。更にひどい場合、阿Qのこれらの自尊心（プライド）は彼自身の苦しい窮境を麻痺させる麻酔剤となって、社会の変革や新思想の受け入れの推進を阻止してしまったと言える。

したがって、阿Qは、高い自尊心（プライド）によって、自分の「奴隸」的身分を改善する思想がないばかりか、自分の「奴隸」的

身分を持ち続けている。

阿Qは「むかしは偉かった」し、見識も高いし、しかも「よく働く」から、本来なら「完璧な人物」と称して差し支えないほどであるが、惜しいことに、彼には体質上に若干の欠点があった。第一の悩みのは、彼の頭の皮膚が数カ所、いつからともなく、おできのために禿げていることである。これも彼の体の一部には違いないが、阿Qの意見では、こればかりは自慢にならぬらしかった。その証拠には、彼は「禿」という言葉、および一切の「禿」に近い発音が嫌いであった。(中略)。「おめえなんかには……」彼は、彼の頭上にあるのは高尚な、立派な禿であって、当たり前の禿でないことを考えていたのである。

阿Qは自分に欠陥のあることが「悩み」になっているが、しかし彼は自分の欠陥を直視せず、ただ仮想したプライドで「おめえなんかには……」で、自己慰安している。事実上この自己欺瞞は、彼の実在する苦境を助けられないばかりでなく、彼自身をさらに愚昧化し麻痺させ、さらに思想上の窮地に陥らせる。言い換えれば、彼の自尊心(プライド)は彼に「奴隷」的な性格を持たせ、そのうえ彼に徹底的に封建的制度への抵抗を放棄させるようになった。阿Qのプライドはあくまでも、彼の「奴隷」的な性格の一つであり、彼に実在している現実から脱出させ、彼の仮想する理想的な虚実の世界に入らせる。この仮想の世界では彼のプライドが実質的な維持者であり、「賢人」の虚実の慰めのような役割を果たす。それは彼に現実で受けた屈辱や圧迫を忘れさせ、彼にごまかしの自慢の精神に沈ませてくれる。彼の中の「賢人」のような存在である自尊心は、現実において彼を「奴

隷」的身分から抜け出させないようにするばかりでなく、かえって阿Qを精神上から麻酔させ、これらの制度の「奴隷」になることを補強する。

5.2 「精神的勝利法」

以上のように、阿Qは、当時のなかなか生きにくいほど厳しかった環境において、彼の自尊心(プライド)によって、そのような厳しい環境に、大変満足し、「意気揚々」としている。阿Qにこの心境を与えてくれるものは、以上の自尊心(プライド)のほかに、もう一つの「精神的勝利法」がある。以下に阿Qの「精神的勝利法」について説明しておく。

阿Qは「閉鎖的な社会」²²に生きるから、また封建的迷信思想に囲まれているため、自己の運命をなかなか把握できない。周りの人間関係においても、いつも冷酷にあつかわれる。彼の「人間としての正当な欲望、願望がみんな迷信や道学によって窒息させられる」が故に、いつも災難に見舞われている。下出鉄男によれば、阿Qのよく使う「精神的勝利法」²³とは、「(阿Qが)自分の置かれたみじめな境遇を直視せず、自分でこしらえた架空の現実に逃避するか、自分より弱そうな人間を愚弄して、常に尊大ぶっている自己欺瞞の精神」のことである。たとえば、阿Qが未荘の一番偉い人物趙旦那と対応するとき、彼の「奴隷」的な生き方の「後退」がよく使われる。

趙旦那は、阿Qの顔を見るなり、満面に朱を注いで怒鳴った。

「阿Q、この極道者め。俺がお前と同族だなどと、お前言ったのか」

阿Qは口を開かなかつた。趙旦那はますますいきり立って、二、三步前へ踏み出して「でたらめをぬかすな。俺に、お前みた

いな同族が、あつてたまるか。お前が趙なものか」。

阿Qは口を開かずに、後へ引こうとした。趙旦那は飛びかかって、平手打ちを食らわせた。

「お前が趙であつてたまるか……お前みたいな奴が、どこを押せば趙と言えるんだ」。

阿Qは、自分の姓が確かに趙であるとは一言も抗弁しなかった。左頬をさすりながら、頭に連れられて退出しただけであつた。外へ出てから、組頭にも油をしばられて、心付を二百文ふんだくられた。…彼は、組頭に二百文心付けを払って、ブンブンして横になったが、そのあとで、考えた。「いまの世の中はでたらめだ。倅が親を殴る……」と、たちまち、趙旦那の威风堂々たる姿が目に見えた。²⁴

以上のように、阿Qが趙旦那に殴られた時、趙旦那の「ますますいきり立って、前に踏み出し」た有様と阿Qの「口を開かずに、後へ引こうと」した有様を如実に描いている。そして、阿Qは自分に加えられた抑圧に対して、まず行動上では、「口を利かない」と「後退」をしていると同時に、さらに精神上での「いまの世の中はでたらめだ。倅が親を殴る……」という慰めによって、趙旦那への抵抗もせず自分の低い身分に萎縮し安住する。この精神上での慰めは「賢人」の虚実の慰めの行為のように彼の不満を鎮めるのである。

その後、阿Qは髭の王と「偽毛唐」になぐられて、一生での「第一屈辱事件」と「第二屈辱事件」に遭う。阿Qは自分の受けた「屈辱」を解消するために、再び彼の想像した世界に入り、「賢人」のような存在である「精神的勝利法」によって慰められ、精神上での

満足で、現実から味わった屈辱を忘れて、自分の劣勢状態のままでもいられた。これについては次の文章からわかる。

阿Qの記憶では、おそらくこれは最近第一の屈辱事件であつた。なぜならば、ひげの王は、そのひげ深いという欠点のために、これまで彼から馬鹿にされこそすれ、彼を馬鹿にしたことはなく、いわんや手出しなどしたことはなかったからである。しかるに、いまや彼に向かって手を出したのである。実に意外なことだ。まさか世間で噂するように、皇帝が科挙を廃止されて、秀才も挙人もなくなったので、それで趙家の威風が地に墜ちて、従って彼までも馬鹿にされるようになったのだろうか。(中略)

阿Qの記憶において、おそらくこれが最近第二の屈辱事件であつた。さいわい、パンパンの音がしてから、もう彼はそれで事件が落ち着いたような気がして、むしろさばさばした。しかも「忘却」という祖先伝来の宝物が効果を現しはじめた。ゆっくり歩いて、居酒屋の門口まできたときには、もう彼は幾分上機嫌にさえなっていた。

以上の文章から、阿Qはどのような屈辱にあわされても、自分の中での「賢人」に頼って、精神上での慰めを得ることによって自分の不満を解消する。精神上での勝利法は阿Qにとって「賢人」のような存在であろう。彼は、ひげの王から味わわされた屈辱と、「偽毛唐」に打たれたことをきれいに忘れ、自分がそのままの自分でいられ、しかもうまく当時の世を生きることができた。

以上の「屈辱事件」のほかに、阿Qは村の連中と喧嘩しているときにも、いつも阿Qのほうに損をこうむる場合が多い。そのとき、彼は相変わらず「せがれにやられたようなも

のだ。今の世の中はさかさまだ……」という思いに依拠し、自分の困窮する境遇をごまかす。さらにまた、どのような精神的勝利法を使っても、やはり自分の気が晴れない場合になったら、彼は「右手を上げて、力いっぱい自分の横面を二つ三つ続けざまに殴りつけた。飛び上がるように痛かった。殴った後は、心が落ち着いて、殴ったのは自分であり、殴られたのは別の自分のような気がしてきた。まもなく、他人を殴ったと同じような……痛いことはまだ痛かったが……気持ちになった。」と、敗北を変じて勝利となすことができた。

以上のように、阿Qはどのような不利な境遇に遭わされても、とかく精神上での自己を慰める方法によって、自分の劣勢状態のまま安住する。彼は、うまく当時の厳しい現実から目をそらして、自分の仮想した社会に入り、そこで自分が自分でいられる。その仮想した社会を維持しているのは、彼の「精神的勝利法」である。そのとき、彼の「精神的勝利法」は彼の仮想した社会で、「賢人」のような働きをする。いつも劣勢状態に陥った彼を、虚無な慰めによって現実からそらして、空想の精神世界に入らせる働きをする。つまり、精神上での勝利法は、彼の中にできないことがないかのようにさせる存在であり、阿Qは「精神的勝利法」のおかげで、今までの劣勢状態に陥った「奴隷」的生き方を維持できる。

つまり、当時の厳しい社会環境は、阿Qが自分の思うままに生きられない環境である。それでも、阿Qは「その場しのぎで生きる」の生き方にとって、当時の社会を生き抜いている。その「その場しのぎで生きる」の生き方が自尊心（プライド）と「精神的勝利法」である。阿Qは自分の身分が低いながらも、精神上では高い（プライド）と精神上での勝

利法による慰めがあるので、現実にも少しも抵抗せずに、自分の「奴隷」的身分に安心安住する。阿Qの自尊心（プライド）と精神上での勝利法は、個人のレベルから見れば、当時の社会の民衆が普遍的に持っている気持ちであると思われる。もっと広く言えば、当時の亡国の間に陥った中国自体も、他国に侵略され「奴隷」的な国になっても、精神上では、自国が優れた「文明国」として自己欺瞞の精神に浸っている。

したがって、阿Qの自尊心（プライド）と精神上での勝利法が、彼を「奴隷」的身分から覚醒させる大きな妨げになったと思われる。そして、阿Qのような自尊心の高い「奴隷」的人間の多いことが、当時の中国変革が難航する一大原因であったと思われる。

6 阿Qの「馬鹿」的性格

阿Qは未荘で家も家族もなかったうえに、自分の正式な名前も持っていなかった。そして阿Qは未荘の村人と同じで被支配階級に属し、身分が低い人間である。換言すれば、阿Qは、家も家族もないばかりでなく、名前も持っていない無標の人間として存在している。阿Qの生活する未荘では、地主たちが支配階級で、身分制度での上層に位置し、身分の高い人間とされる。阿Qは被支配階級で下層の人間である。当時の身分制度によれば、身分の低い人が身分の高い人に従順であり、抵触することは許されなかった。しかし名前も持っていない阿Qは、つい自分が趙旦那のより系図上の身分が高いという話をした。

彼（阿Q）はもともと（自分が）趙旦那とは同族であって、しかも仔細に系図をたどれば、彼の方が秀才より三代上に当たるはずだから。（中略）ところが翌日になる

と、組頭が来て阿Qを趙旦那のところへ引っ張っていった。旦那は、阿Qの顔を見るなり、満面に朱を注いで怒鳴った。

「阿Q、この極道者め。俺がお前と同族だなどと、お前言ったのか」

阿Qは口を開かなかった。

趙旦那はますますいきり立って、二、三步前へ踏み出して「でたらめをぬかすな俺に、お前みたいな同族が、あつてたまるか。お前が趙なものか」

阿Qは口を開かずに、後へ引こうとした。趙旦那は飛びかかって、平手打ちを食らわせた。

「お前が趙であつてたまるか……お前みたいな奴が、どこを押せば趙とといえるんだ²⁵

阿Qの言動は、まず未荘の村人に非「常識」な行動とされ、非難された。したがって阿Qが趙旦那に殴られたことに対して、未荘の村人は口々に、「阿Qはあまりでたらめなことを言うから、自分から殴られるような目に会うのだ。彼はおそらく趙という姓ではあるまい、たといほんとうは趙という姓であつたにしろ、れっきとした趙旦那がいられるかぎり、めつたなことは口に出して言うものではない。」²⁶と言って、阿Qを叱責した。彼らの考えでは、趙旦那は未荘の大旦那で、「住民の深い尊敬を受け」ている人間であり、阿Qは家も家族も地位もなく、もちろん趙旦那と同族などと言つてはならないはずだった。

そして当時の「男女の別」の道德規範にも、阿Qは一方では、その規範の「奴隷」でありながらも、他方、彼はついに、手を出して「尼さんの顔をつねる」行為をした。その結果、突然に呉媽に求愛する行動にも出た。阿Qのこの二つの行動は、封建的道德規範に違反してしまい、「馬鹿」の非「常識」な言

動とされた。そのため阿Qの行動は手ひどい打撃を与えられた。阿Qのこれらの言動は、いずれも自覚的ではないが、中井政喜によれば、「反抗の原初形態」あるいは「人としての自覚の萌芽」である可能性がある。

つまり阿Qは一方では、封建的行動規範をしっかりと守る「奴隷」的性格を持ちながら、他方では、以上のような封建的行動規範に違反する非「常識」な「馬鹿」の性格を持っている。この二つの矛盾しあう性格が阿Qの中に存在している。二つの矛盾のバランスを保持する「担い手」が、阿Qの中にある自尊心（プライド）であると思われる。というのは、阿Qが自分の「奴隷」的身分で軽蔑されたとき、自分の不満をこぼしたいとき、彼の中にある自尊心（プライド）がその時にわいてきて、自己欺瞞によって彼の「馬鹿」的な不満な気持ちを慰め、彼を仮想の優越の世界に浸らせ、自分の「奴隷」的身分に満足させるようにするからである。

皮肉なことに、未荘の頂点にいる、未荘の村民を圧迫する封建制度の維持者趙旦那は、未荘の村民に反抗されないばかりか、かえって未荘の村民から尊敬を払われ、村民に擁護される。反対に、当時の封建的身分制度に抵抗する傾向、「馬鹿」的行動がある阿Qは、村民に叱責され排斥される。これは、当時の社会で一番皮肉な現象であると思われる。これこそは当時の社会で何よりも大きい問題の一つであると思う。

6.1 「馬鹿」的な阿Qの破滅

以上、阿Qの中の三つの性格を考察してみた。まとめて言えば、阿Qの中には、「奴隷」的性格と、高い自尊心（プライド）として存在する「賢人」的性格と、「馬鹿」的性格があり、同時に阿Qの一身に集まっている。これらの矛盾しあう性格がバランスをとって阿

Qの中に組み合わされて存在する。阿Qは自分の「奴隸」的身分に不満で、愚痴をこぼしたいとき、彼の中の自尊心（プライド）がわいてきて、「賢人」的虚実の慰めによって精神上慰められ、この自己欺瞞の仮想世界によって実際の「奴隸」的身分や劣勢状態に満足する。すなわち彼の自尊心（プライド）の自己欺瞞によって、阿Qは現実社会を回避し、仮想の欺瞞の境界に入り、精神上から慰められ、現実への不満を鎮める。同時に阿Qの中の「奴隸」的思想を補強することになる。阿Qに「馬鹿」的な言動があったら、彼の中で「奴隸」的性格が彼の中の「馬鹿」的性格を阻止するのに動いている。阿Qが呉媽に求愛した「馬鹿」的な行為は、大騒ぎを引き起こし、ひどい処罰を受けた。

「おめえ、おらと寝ろ、おらと寝ろ」阿Qは、急に跳びかかって、呉媽の足元にひざまずいた。一瞬間、ひっそりとなった。「ヒヤア」息を呑んでいた呉媽は、突然慄え出すと、大声をあげて表へ駆け出していった。駆けながらわめいて、しまいに泣き声になったらしかった。……「恩知らず」秀才は、標準語を使って背後から罵声を浴びせた。

……

なんのかのとお説教である。阿Qは無論一言もない。最後に、夜中だというので、組頭への祝儀は倍にして四百文払わなければならなかった。阿Qは現ナマがなかったので、帽子を質に入れた。それから、次のような五ヶ条の取り決めを行った。

……むろん、阿Qは全部承諾した。残念ながら金がなかった。

阿Qの無意識にした「馬鹿」的な求愛行動は、彼の周囲の奴隸たちから手ひどい打撃を

受けただけでなく、彼自身のうちでも「我慢や、退却、従順」という「奴隸」的性格が、彼の「馬鹿」的行為を阻止しようとした。それは、彼をもう一度自分の「奴隸」的性格と、自己欺瞞による仮想の高い自尊心の性格の中に戻させた。悲劇的なことに、阿Qは自分のうちの矛盾しあう性格を自覚していなかった。そのような三つの性格を無自覚に持っていることが、阿Qをその悲劇的な運命から逃れなくさせ、命を落とす窮地に陥れた。

阿Qは（見せしめにされる場面）そこで、喝采した人々の方をもう一度眺めた。

その刹那、彼の思考は再び旋風のように頭のなかを駆け巡るような気がした。四年前、彼は山の麓で、一匹の飢えた狼に出会ったことがある。（中略）

ところが、今度という今度、これまで見たこともない、もっと恐ろしい眼を、彼は見たのである。（中略）

それらの眼どもは、スーッと、ひとつに合わさったかと思うと、いきなり彼の魂に噛みついた。

「助けて……」

阿Qは処刑されるときに、見物の群衆の目を見て、初めて「恐ろしい」という感じがした。今までの阿Qは、ただ自分の仮想の、自尊心（プライド）が高い世界に生きていたので、現実の、自分の低い身分や劣勢状態を正視せず、自己欺瞞の「奴隸」的世界に安住していた。そのため、現実の普通の人間としての「恐ろしい」感じが全然しなかった。

しかし今度という今度、彼は群衆の目から今までの自分の生き方を顧みることができ、今までの自分の、「奴隸」的身分、自己欺瞞の自尊心（プライド）、自分の「馬鹿」的行動をともに正視するようになった。その時、

阿Qは初めて、これまでの自分の「奴隸」的身分、自己欺瞞の世界から抜け出したいという気持ちになった。だから「助けてくれ」という叫び声をだそうとした。この声が阿Qの自己覚醒の萌芽であると読み取れる。つまり、「奴隸」的性格、自尊心（プライド）が高い性格、「馬鹿」的な性格を一身に集めている阿Qは、その瞬間に本心で当時の厳しい現実と向き合いはじめ、戦う気持ちになったからこそ、「助けてくれ」と叫ぼうとした。阿Qはすぐに死ぬが、しかし彼の最後の叫び出そうとする行為は当時の中国の「奴隸」的生活をしている民衆をも救おうとする、最後の救いの叫び声の行為であると言える。当時深い危機に陥っていた中国を救済する最後の叫び声、最後の希望の叫び声といっても過言ではない。

当時の旧中国で阿Qのような人間像について、魯迅は次のように語る。「彼ら（阿Qたち）は羊であると同時に凶獣である。自分より凶暴な獣に出会ったら、羊のようになるし、自分より弱い羊を見た時は、凶獣のようになる」²⁷と言う。もし阿Qが本当に権力者になったら、多分魯迅の言う凶獣になるだろう。というのも阿Qの自己尊大と妄想は、日々の求めている夢であるから。魯迅の論を借りれば、「黄金世界が出現するまで、この二種の性質を同時に持つのは免れないようである。しかし現れたときの状況を見れば、勇敢か卑怯かの大きな差がでてくる。残念なことに、中国人は羊には凶獣の相を現し、凶獣には羊の相を現す。だからたとえ凶獣の相を現していても、やはり卑怯な国民なのだ。こんなことでは、きっとおしまいになる」。

したがって、当時の中国を救うには、「他のものを持って来る必要はない。青年たちが、この二種の古伝の用法をひっくりかえして使えば、それで足りる。相手が凶獣の時は

凶獣のようになり、相手が羊の時は羊のようになる。そうすればどんな悪魔であろうと、彼らはそれぞれの地獄に戻るしかなくなるであろう。」そうなったときに、中国は近代化思想に達する道ができるだろう。

しかし当時の旧中国では、国家から見れば、外国に侵略されても、精神上で、自国が文明国であるとして高い自負を持ち、国を時代とともに進歩させる思想を持っていなかった。国民方見れば、阿Qのような「賢人」的、「馬鹿」的、「奴隸」的な人間がいる。ゆえに、魯迅の提出した中国を救う方法はなかなか実現できなかった。つまり、阿Qのような国民は、「羊」のような人間に対しては「凶獣」のような人間になり、「凶獣」のような人間に対しては「羊」のようになってしまう。彼らは自分より上層にいる支配者の前では、徹頭徹尾の「羊」あるいは「奴隸」になり、自分より弱い人間の前には権力を振るう「凶獣」あるいは制度の維持者である「賢人」になってしまう。

7 おわりに

本論文は主に阿Qの性格を検討してみた。阿Qが持っている性格は長い歴史の産物であるだけでなく、近代中国の当時の社会環境からできたものである。

阿Qには、「奴隸」的性格もあれば、「馬鹿」のような非「常識」の性格も持っている。この矛盾しあう性格を同時に阿Qの中に存在させることができるのは、阿Qの「賢人」のような虚実の働きをする自尊心（プライド）であろうと思われる。この三つの性格が一緒に阿Qの中に存在しているからこそ、阿Qは現実世界を直視せず、自尊心（プライド）によって仮想世界の中で「奴隸」の身分に安住している。

阿Qは一方では、自分の身分が低く、支配階級に圧迫され、しばしば村民に愚弄されるなど、厳しい生活環境に在って、非常に困窮した生活を送っている。この厳しい現実を前にして、阿Qは抵抗しないばかりでなく、かえって自分のプライドによって、「奴隸」的な身分を正視せずに、自己欺瞞の精神上での仮想に依拠し、「奴隸」的な身分をしっかりと守っている。阿Qはいつも自分の陥る厳しい現実から目をそらして、強い自尊心で自分を尊大にさせ、あたかも自分が偉い人物であるかのような虚実の優越的世界に浸たり、自己を麻痺させる。結局、阿Qは依然として「奴隸」的な性格を持ったままで、阿Qの実際の、現実の「奴隸」的な身分を改めるのに何の役にも立たない。

もう一方で、阿Qは「馬鹿」的な性格を持っている。阿Qのこの「馬鹿」的な性格は、その封建的道德規範に違反する行動によって、周囲の「奴隸」たちからひどく攻撃され、また彼自身の持つ「奴隸」的な性格によって打撃を受ける。したがって阿Qは呉媽に求愛したら、すぐに封建的道德規範の「奴隸」である呉媽や趙秀才に追い払われた。それは、彼自身にある「奴隸」的な性格が駆使したと思われる。阿Qが最後に銃殺されるのは、「馬鹿」的な行動がもたらした必然性のあることであろう。それは、阿Qの矛盾した性格構造が引き起こした当時の旧社会の必然的な結果である。

つまり当時の旧中国における阿Qのような民衆は、以上のような「賢人」「馬鹿」「奴隸」などの、矛盾しあう性格を持っているがゆえに、民衆の精神を改造するのは非常に困難であった。同時に、国の面から見れば、当時の中国は非常に貧困で、亡国の間際に陥っていたが、しかし依然として自国が「文明国」であると自慢した。当時の中国は物質文明が

非常に貧困であっても、依然として「精神文明の大国」であると自慢し、中国の近代化西洋化する課題は困難であったと思われる。したがって民衆の方面から見れば、当時の中国を救う、現実を直視できる国民はなかなか出現できなかったと思う「阿Q正伝」はそのような絶望的な現実をリアルに表現している。しかし、「阿Q正伝」は当時のその現実を簡単に脱出できるように書くのではなく、実はどんなに困難かということ、この作品はリアルに描いている。しかし絶望的なことを絶望のままに書いて、終わりという小説ではなかった。ほんのわずかであるが、未来への希望があるように書かれている。この希望は、最後に阿Qが「助けてくれ」と叫び出そうとする行為の中に、阿Qがそれまで「精神的勝利法」で自己欺瞞してきたことを自覚したのではないか、という点にある。それまで、彼は気ままに「精神的勝利法」に頼って、あたかも絶望がないかのような仮想を作り出して、自分を慰めた。彼はあたかも自分を救う道があるかのように、厳しい状況に逃げ道があるかのように、自分をごまかしていた。当時の厳しい現実から目をそらし、あたかも絶望的ではないかのように、自分をごまかし、その時その場を過ぎていく。そのように過ぎてきた彼の絶望的な生活ありようの中で、「助けてくれ」という言葉を口にしようとしたということは、当時の中国を救う最後の希望が、そこに託されたことを意味した。

もし当時の中国において国民のみんなが、「助けてくれ」と叫び出したら、当時の中国は変わるはずであろう。しかし当時の国民は、「助けてくれ」とは叫びださなかった。彼らが叫び出さず、国の現状は絶望的であった。それにもかかわらず、国民が国を救う希望があるかのように自分をごまかしている間は、阿Qのように銃殺されるほかに、何の前

途もないであろう。しかし阿Qは銃殺されるその最後のときになって、叫び出そうとした。

もし当時の中国の国民も本当に阿Qのように叫び出したら、国は変わるはずであった。阿Qは個人として、処刑されてしまったが、しかしもし国民みんなが叫び出したら、中国

はそれから変わる可能性があるかもしれない。そういう希望を、この小説は最後に示している。「阿Q正伝」は、中国に残されている希望を描き出している作品である。これこそ、阿Qの矛盾しあう性格が「阿Q正伝」に描かれた、部分的意義にとどまらない全体的意義であろう。

〔注〕

- 1 特別に挟み込まれて掲載された、文芸文化欄の頁である。『晨报副刊』は、五四時期の有名な四大副刊の一つである。その前身は北京『農州鐘報』と『晨报』第七面であった。主に、西洋の思想や知識、文化を紹介している。内容は新文化運動に傾斜している。『晨报』の『副刊』は五四前後において、西洋の新思想を宣伝した雑誌『新青年』以外の、もう一つの重要な新文学の陣地であった。
- 2 林興宅。「阿Qの性格システムを論じて」。『魯迅研究副刊』は、当時の新聞に。1984. 第1期。
- 3 汪衛東。「阿Q正伝－魯迅国民性批判的小説形態」。『魯迅研究月刊』2011.11.
- 4 出典は前掲林興宅論文「阿Qの性出典は前掲林興宅論文「阿Qの性格システムを論じて」である。格システムを論じて」である。
- 5 出典は前掲林興宅論文「阿Qの性格システムを論じて」である。システムの分析方法論とは、「自然界の立場から見れば、すべての自然はみんなシステムの形式で網のように存在している有機的全体であり、その中でいづれ物事がみんなそれなりの要素で一定の構成方式で織り込まれているシステムである。それぞれの仕組み構成がそれぞれの機能を持っている。だから自然界は、それぞれの仕組みが違う、レベルが要素からなっている開放的なシステムである。だから、この開放的システムがいつまでも絶え間ない運動中にいられている。いづれの因子にも、その発声、発展、絶滅及び転化へという過程を経て進化したのであり、システムとその要素の間にはお互いに転化しあう状態になっている」ということである。
- 6 林興宅の論述十種の対立的性格システムが次のようである。例えば、「素朴愚昧のうちに如才なく無頼である」、「率直できままでありながら正統な道を守る」、「自尊心が強くて尊大でありながら自己卑下する」、「負けん気が強いながらも恥を忍んで屈伏する」、「視野が狭くて保守的でありながら盲目的に流行を追う」、「異端を排斥しながら革命にあこがれる」、「権勢を憎みながらも権勢者に取り入る」、「横暴なふるまいをするが懦弱で卑怯である」、「現状に不満でながら、現状に安住する」ということである。
- 7 汪衛東。「阿Q正伝－魯迅国民性批判的小説形態」。『魯迅研究月刊』。2011.11.
- 8 汪衛東は「私欲中心」説を提出したが、具体的になんであるかを説明しなかった。筆者の理解する「私欲中心」とは、個人の感性的欲望を中心にし、その人のすべての行為が個人の物質に対する欲求に左右されるものである。「私欲中心」を成り立たせる「文化の内包」を発掘することが課題となる。
- 9 魯迅の書いた寓話「賢人、馬鹿、奴隸〔聰明人和傻子和奴才〕」(1925・12)のことである。魯迅の散文詩集『野草』に収める。
- 10 魯迅。「賢人、馬鹿、奴隸」。『野草』。1925.12. 原文は「それはほんとうにお気の毒な」である。
- 11 「賢人、馬鹿、奴隸」の中の内容である。原文が「主人に窓をひとつ開けてくれとはいわんのか、おまえに窓をひとつあけてやるのさ」である。
- 12 原文：「我们极容易变成奴隶，而且变了之后，还万分喜欢」。魯迅「灯下漫筆」。『墳』1925. 後に『魯迅全集』第1巻に収録されている。人民文学出版社。1981.
- 13 原文：「愚民的发生，是愚民政策的结果。」。魯迅。「上海所感」。『集外集拾遺』。1934. 後に『魯迅全集』第7巻に収録されている。人民文学出版社。1981.
- 14 魯迅。「十四年の読経」。『華蓋集』1925. 後に『魯迅全集』第3巻に収録されている。人民文学出版社。1981.
- 15 魯迅。「偶成」。『南腔北調集』。1933. 『魯迅全集』第5巻。人民文学出版社。1981. 初出は1933年10月15日洛文という署名で「申報月刊」第2巻第10号。原文：「奴隸們受慣了「酷刑」的教育，他們

- 只知道对人应该用酷刑，他们不能‘推己及人’更不能推想一下，就‘感同身受’。」鲁迅。「偶成」，《南腔北调集》。1933。後に『鲁迅全集』第5巻に収録されている。人民文学出版社。1981。
- ¹⁶ 出典は前掲鲁迅論文「偶成」で(同上)ある。原文：「奴隶们受惯了猪狗的待遇，他们只知道人们无异于猪狗，用奴隶或半奴隶的幸福者，向来只怕‘奴隶造反’。(中略)人民被治得好像厚皮的，没有感觉的癞象一样了」である。
- ¹⁷ 原文は、清朝時代の魏源が1842年に提出した、「师夷长技以制夷」(西洋国の優れた軍事技術を学び、自国の能力を強めてから、西洋諸国を制御する)これは、後ほど近現代中国人文人たちの、「中国を改良する」主な思想となった。
- ¹⁸ 原文：「站着说！不要跪！」长衫人物都吆喝说。阿Q虽然似乎懂得，但总觉得站不住，身不由己的蹲了下去，而且终于趁势改为跪下了。“奴隶性！……”长衫人物又鄙夷似的说，但也没有叫他起来。」「阿Q正伝」第九章「大团圆」。日本語訳は竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記他十二篇(呐喊)』。岩波文庫。1955年第一刷。105頁を参照。
- ¹⁹ 原文：「体质和精神都已经硬化了的人民、对于极小的一点改革也是无不加以阻挠、表面上好像是恐怕于自己不便、其实是恐怕于自己不利、但所设的口实、却往往是及其公正而且堂皇的」。鲁迅。「習慣と改革」。『二心集』1930。03。後に『鲁迅全集』第4巻に収録されている。人民文学出版社。1981。
- ²⁰ 原文：「读一点书的都知道、(中国人)是怎样敷衍、偷生、献媚、弄权、自私…再进一步并可以悟出中国人是健忘的…衰老的国度大概就免不了有这类现象」。鲁迅。「十四年の読経」。『華蓋集』1925。後に『鲁迅全集』第3巻に収録されている。人民文学出版社。1981。
- ²¹ 汪衛東。「阿Q正伝—鲁迅国民性批判の小説形態」。『鲁迅研究月刊』。2011。11。汪衛東がその論文の中で、その言葉を使って、阿Qが当時の世を生きられる生き方である。もともと「苟活」という言葉であった。
- ²² 中井政喜。「鲁迅の「祝福」についてのノート(一)—鲁迅の民衆観から見る」。『中国文化の伝統と現代—南腔北調論集』山田敬三先生古稀記念論集。鲁迅篇。東方書店。2007。07出版。1057-1058頁を参照。
- ²³ 下出鉄男。「阿Qの生について—置き去りにされた〈現在〉」。『東京女子大学日本文学』第83号。1995年。80頁を参照。
- ²⁴ 前掲竹内好著書『阿Q正伝・狂人日記・他十二篇(呐喊)』。岩波文庫2000.05.08。第69刷発行。102頁を参照。
- ²⁵ 竹内好。『阿Q正伝・狂人日記・他十二編』。岩波文庫。2000。第69刷。第二章「優勝略記」の中の原文の内容である。
- ²⁶ 竹内好。『阿Q正伝・狂人日記・他十二編』。岩波文庫。2000。第69刷。第一章「序」の中の原文の内容である。
- ²⁷ 原文：「他们是羊、同时也是凶兽、当遇见比他更凶的凶兽时便现羊样、遇见比他更弱的羊时便现凶兽样。」「在黄金世界还未到来之前、人们恐怕总不免同时含有这两种性质、只看发现的时候的情形怎样、就显出勇敢和卑怯的大区别来。可惜中国人但对于羊显凶兽相、而对于凶兽则显羊样、所以即使显着凶兽相、也还是卑怯的国民。这样下去、一定要完结的。(中略)要中国得救、也不必添加什么东西进去、只要青年们将这两种性质的古传用法、反过来一用就可以了：对手如凶兽时就如凶兽、对手如羊时就如羊！那么无论什么魔鬼、就都只能回到他自己的地狱里去」。鲁迅。「忽然想到(七)〔ふと思ひ到って(七)〕」。1925。中国现当代名家精品書。内モンゴル人民出版社。2013.11 第一版。339-341頁。

参考文献

- * 鲁迅。『鲁迅全集』。人民文学出版社。1981.01。
- * 鲁迅作、竹内好訳。『阿Q正伝・狂人日記・他十二篇』。岩波文庫。2000年、第69刷
- * 竹内好。『鲁迅』。未来社。1977年。第15刷
- * 増田渉。『阿Q正伝』岩波文庫。1956。
- * 丸尾常喜。『人と鬼との葛藤』。岩波書店。1993。
- * 竹内好等。『現代中国文学』。河出書房新社。1970。
- * 伊藤虎丸。『鲁迅と日本人』。朝日選書。1983.04。
- * 広野由美子。『批評理論入門』。中公新書。2005.03。
- * 下出鉄男。「阿Qの生について—置き去りにされた〈現在〉」。『東京女子大学日本文学』第83号。1995。
- * 川本栄三郎。「阿Q正伝の物語り文法」。『Artes Liberales』第45号。岩手大学人文社会科学部。1989。
- * 中井政喜。「鲁迅の「祝福」についてのノート(一)—鲁迅の民衆観から見る」。『中国文化の伝統と現代—南腔北調論集』山田敬三先生古稀記念論集。鲁迅篇。東方書店。2007.07出版。
- * 中井正喜。『鲁迅探索』。汲古書院。2006。
- * J・ヒリス・ミラー著、伊藤誓、大島由紀夫訳。『読むことの理論』。法政大学出版局。2000.11。
- * 内田樹。『寝ながら学べる構造主義』。文芸春秋。文春新書。2002.06。

- * 宮城音弥. 『精神分析入門』. 岩波新書. 1959.05.
- * 斉藤知也. 『教室で開かれる〈語り〉－文学教育の根拠を求めて』. 教育出版. 2009.08.
- * 高華平. 『中国文化典籍選読』. 華中師範大学出版社. 2007.08.
- * 鄭振鐸. 「阿Q正伝論」. 『文学週報』第251期、文学研究会機関誌、1923.
- * 茅盾. 『茅盾散文集』. 天馬出版社、1933.
- * 汪衛東. 「阿Q正伝－魯迅国民性批判的小説形態」. 『魯迅研究月刊』. 2011.11.
- * 魏源. 『海国図志』. 中州古典籍出版社. 1999.
- * 錢理群等. 『中国現代文学三十年』. 北京大学出版社. 1998.08.
- * 林興宅. 「阿Qの性格システムを論じる」. 『魯迅研究』. 1984年第1期.